

太田和夫先生を偲んで

須田クリニック 須田昭夫

東京透析懇談会をつくり、この会のために力を尽くされた太田和夫先生が、昨年 7 月にご他界されました。謹んでご冥福をお祈りしたいと思います。この席で太田先生のことを皆様にお話しできることを、たいへん光栄に存じます。太田先生の業績は日本人工臓器学会会誌 33 巻（1）にきれいに纏められております。また同会誌 39 巻（2）には追悼文が掲載されました。太田先生の業績を知るとはとりもなおさず、日本の腎不全治療の歴史を知ることでもあります。ぜひお目通しされることをお勧めいたします。さて大の山好きだった太田先生は、とくに上高地をしばしば訪れました。亡くなられる 10 日前にも上高地へ行っておられます。堂々として美しい穂高岳と、最後のお別れをするためだったと思います。

日本の透析患者数がまだ 7000 人程度だった 1974 年 3 月、東京透析懇談会が誕生しました。これから発展するであろう透析医療のために、医師、看護師、技術者を対象として透析知識を普及し、経験や症例をみんなで討論して共に見識を広げることを目的に掲げていました。その前年の 1973 年、透析患者数がまだ 5000 人足らずのとき、太田先生は腎臓学会、小児科学会、泌尿器科学会、移植学会、透析研究会に諮り、透析療法合同専門委員会を立ち上げ、透析技師の資格認定制度作りを開始されました。厚生省には国家資格を作るように働きかけたのですが、全く取り合ってもらえず、やむなく学会認定を目標にいたしました。教科書作り、講習会の開催、認定試験の実施など、大変な苦勞の末に最初の透析技術認定師が誕生したのは 1980 年のことで、委員会発足から 7 年が経過していました。

その 3 年後の 1983 年、学会認定の透析技師がシャント穿刺をしているのは、保健師助産師看護師法違反ではないかと、技師が訴えられる裁判が宇都宮で発生しました。1986 年この裁判の参考人となった太田先生は、これを絶好の機会と捉えて堂々と論陣を張りました。

他の参考人たちが、技師に穿刺をさせていないと証言した後で、「私のいる女子医大では技師が穿刺をしています」と平然と証言する太田先生に、傍聴人たちは息をのみました。裁判官は「それではあなたも法に問われることになりましたが、間違いありませんか？」と聞き返しました。太田先生はびくともせず、おおむね次のように述べられました。

「間違いありません。あなた方の言う意味では、私は法に問われることになるでしょう。しかし、あなた方は現実を知らなすぎます。日本にはいま、技師の力によって生きている透析患者さんが、5 万人もいます。医師と看護婦だけでは、こんなにたくさんの患者さんの透析治療を、続けることができません。透析機械の操作や維持管理には、電気の知識が必要です。技師がいなければ透析治療は成り立たないのです。私たちは技師の国家資格化を求めてきましたが、国は教育制度も資格制度も作りませんでした。責められるべきは国にあります。医学が進歩して法律が現実には合わなくなっています。法律のほうを変えなくてはなりません」。

臨床工学技師法が成立したのは翌年の1987年でした。透析技術認定師が誕生してからさらに7年が経過していました。太田先生の奥様によれば、技師の国家資格化は太田先生が最も時間をかけて、心血を注いだ仕事だったようです。日本の腎不全治療の土台作りに、力を尽くそうと考えておられたのだと思います。

太田先生は、山や何気ない風物の写真を、たくさん残されました。数枚の写真についてお話をさせていただきます。まず雪融けの水が谷川の急流となって、水しぶきを上げている写真があります。添え書きには「雪から溶け出た一滴でも、谷の仲間を集めれば奔流となる。この流れを誰も止めることはできない」とあります。技師の国家資格化は私一人の力ではないよ、みんなが力を合わせたおかげなんだよ、と言っておられるように思います。太田先生にとって、腎不全治療に携わる人たちはみんな仲間だったのです。

次はモンブランの稜線を行く、登山者の列の写真です。添えられた文には「透析者は重い荷を背負って、雪の稜線を歩いている登山者のようだ。ちょっとした油断や不注意が、思いがけない結果を招いてしまう。透析スタッフは良きガイドとなり、また心の温かい山小屋の主人となって、長い尾根づたいの道を、病を共有する心で共に歩んでゆきたい。」と書かれています。指導や管理という言葉とは、一味違ったお考えのように思われます。いつも患者さんの気持ちを考えている先生でした。

もう1枚は欧州の山です。「グランドジョラスからエイギュ・デュ・ミディを望む」と書かれています。針のように鋭い峰々が、幾重にも重なる山塊の写真です。太田先生は「腎不全の治療は山また山を越えて、やっとここまで辿りついた。しかしなお行く手には、針のようなピークが立ちほだかっている。これからもみんなで力を合わせ、技術を駆使して一歩、また一歩と進んで行きたい。」と書かれました。

透析治療は発達しながら、数々の難問を乗り越えてきました。ややもすれば私たちは、解決できる問題はひととおりのやりつくした、これ以上のことはもうあまり残されていない、と思ってしまうかもしれません。ちょうど大型旅客機が水平飛行に移って、あとはこのまま時間が過ぎればよいというような気分です。しかし太田先生の目には、透析治療が解決しなければならない数々の問題が、鋭く尖った峰々のように、はっきりと見えていたのでしょう。私たちは細心の注意を払いながら、一歩また一歩と歩き続けることを、太田先生から期待されているのです。

腎不全治療の普及と発展に一生をささげた、かけがえのない巨人を私たちは失いました。しかし透析と腎移植の第一人者であった太田先生の心は、すでに多くの人たちの心の中に移植されました。今後は人々の心の中で生き続けることを願っています。ご清聴ありがとうございました。

文献

1) 太田和夫:私の歩んだ道. 人工臓器33(3):260-71、2004

2) 高橋公太ら:太田和夫先生の死を悼む. 人工臓器39(3):140-144、2010